414
A 198

余自ら一方に在て敵軍の情體を窺ふに
曠職にして甚た協同戦争を為すへきも
數年後果て裨益の利を得るや余
之を狐疑す。而此艦並ウオーニング艦の
士官且士卒百八十一名ベルクナップ氏の指
揮に依り上陸を為せし然るに其日ハ暗霧
一里乃至一里半にて[illegible]

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

雖ホ雛等北岸砲に燿して單兵ハ掃逃して
見へたり山頭砲臺野に在る砲兵の調動
且伏兵の模様を此地が終日望遠鏡にて相
たり而彼等の戦争計策に識て仍智
猛勇を極めたり彼等皆な能く亜墨利加
印度人に倣ひたり其印度人ハ西國に前
進せし者にてフロリダーに於て其勇猛を振
事を記臆し居る者今皆な之に似たり

事を想像す
フォルモサー地蛮の人戦勝し得るも此事ハ
亜米利加人の在りし如く彼等至る所に一ヶ
不完全の粗なる敵を拒て木架屋（木架屋八三）
四層を積立て四方に数多の小窓ありて砲を発する為なり山を設けまた此の塀と
先つ強くて進入し且砲ホを移し得る様き僅の
兵隊を立けり而して其の近傍に大なる江湾
あり然して二ヶ所の村里樹木ありて在りやしキやと小

近き村ハ皆下の郷の如く雑種人にて且其
村のダウタイも雑種人なり且一ヶ村ハ江湾
の外部なるに依て西東風を防ハ其反向
ニ水流も参差として樹力なれとも南北
風を防ハ四五日も或時ハ波濤海岸を打洗き
或ハ木風を生すゝ枚を防ハ水流も烈しければ
リヤとキヤと防禦ならす事ハ海岸を引
揚け木葉を信て立あり然ハ其舟を溜

まれん事を恐れてなり僅か百人計りの
軍兵にて樟地の道路を開くて足らずして
其境路過樹木乱なし且リヤとキヤと下江湾
ニ向の山ハ高さ四百フートニ越へされハ海上
も見る岩礁ニ裏其外の危険もなし
ミタウタイニ村ハ林ニて樹木の如く多くの
岩礁へあつト云ハ然れとも西東風を防ハ却て
村の永久安全の碇泊を得難し旧其ち故郷

人ハ其土民を殊更に恐怖して容易に手
を附る者なし今回其島嶼を襲撃せん
とす欧羅巴人より尚烈しき恐怖をいだき
事業を為さず各部分に都る其附近にて
を點して居らざる無し
余等無事安碇せし成否や此野蛮の軍
二里を隔たる山頭に於て人或ハ拾二人斗り
の小隊兵を集聚し各自小銃を携へ
陣を擺搆し敢る前に進発せざりしが
余軍其営壁へ攻進しけれバ其時彼等漸く
余軍尚戦ハんため山を降まで続きて彼等
伏兵せし処へ余軍を導き忽ち炮を発し
其伏兵ハ後に退けり然して又後ノ伏せる
兵の処へ追ひ導けり其武器ハ皆燧烟
なる小銃にて前極ハ更に見請けず其土民
ハ裸体にて腰に草を為し赤色にてぬれ

外観ニ文飾せり且耕作ニ為め一反
の田地をも不持し各其田地ニ茅屋を建て
且牧牛をも不持しかり余山野ニ畜飼せる
牧牛を数へして十四疋を見たり
此土民ハ支那人の想像して記録せしその
あれとも此目て見しハ餘程不遜せり此土
民猛獣よりも不術なるものあり併し
土民此猛獣を猟する為ニ餘程危険ニ見ゆ

賦けたり要するニフオルモサー混雑ニ付余の
需並且不存と云てボンリヒゲーム氏の得知
頓首々

代水師提督
アム、エム、ベル

外務省
外務省

外務省